

8/27(日)の道新で紹介されました。
↓ 在庫をご確認の上ぜひご注文を。寿郎社

2023年 令和5年 8月27日(日)曜日

北海道新聞

ほっかいどう



寿郎社 2640円

十勝管内浦幌町に住むアイヌ民族のグループ、ラポロアイヌネイションの知名度が国際的に高まっているのは、彼らが日本で初めて自分たちには「先住権」がある、と主張して裁判を起こしたからだ。

札幌地裁の法廷でラポロは「先住民族の権利に関する国連宣言」（2007年採択）をはじめとする最新の国際基準に基づき弁論を展開している。日本の司法がどんな判決を下すのか、世界の先住民族や人権機関が注目している。

とはいえ「初めて」で「最新」なだけに、準備なしに問題を理解するのは容易ではない。

それはラポロの内部でも同じだった。本書は、2020年夏の提訴の前段、「漁師の仕事に明け暮っていたラポロアイヌネイションのメンバーがアイヌを自覚し、先住権を意識するようになっていく過程を、共同通信記者の著者

海のアインの丸木舟

ラポロアイヌネイションの闘い

青柳絵梨子 著

が、密着取材で記録したドキュメンタリーである。

指南役は、米国留学で先住民法を学んできた市川守弘弁護士（訴訟原告代理人）。著者はメンバーたちと一緒に市川弁護士の講義を聞きながら、アイヌ地域集団についての先住権の本質に迫ろうとする。

ラポロ以前のアイヌ民族復権運動への目配りも怠りない。北海道ウタリ協会（現北海道アイヌ協会）が主導した80年代のアイヌ新法制定要求、日本の司法が初めてアイヌを先住民族と認定した90年代の「風谷タム裁判」、大学が収集したアイヌ遺骨の地元返還を求めた小川隆吉氏らの2010年代の運動まで、著者は当時の記録を引用しながらアウトラインを描く。反射的に、「復権」を阻み続けるものの正体が浮かび上がる。

歴史家の榎森進・東北学院大学名誉教授が「世界的な意義を持つ」と評するこの裁判を、同時代・同地域に暮らす一人として身迷きないようにしたい。どこを見るべきか、きつと本書が手引きしてくれる。

（平田剛士・フリーランス記者）

と切り抜いてPOPとしてお使い下さい。

ご注文は下記にご記入の上→寿郎社 FAX011-708-8566

注文票

●書店名	●発行	●発注日	●備考
●書店名	●発行 寿郎社	●発注日	●備考
●書店名	●注文数	●発注日	●備考
●書店名	●注文数	●発注日	●備考

●書店名	●発行	●発注日	●備考
●書店名	●発行 寿郎社	●発注日	●備考
●書店名	●注文数	●発注日	●備考
●書店名	●注文数	●発注日	●備考

●著者名 青柳 絵梨子

●書名 海のアインの丸木舟
ラポロアイヌネイションの闘い

●定価：本体 2400 円 + 税

●ISBN 978-4-909281-53-1 C0036

●御担当者名